

ければなりません。古い方に比較的くわしく、江戸時代以後にことに粗でありますのは、著者の不勉強もありますが、一つには、平家物語以前の古典を読むのにも何らかの参考になるようにという、欲の深い考えをもつたからであります。それで、本書はまた、高等学校や大学の教科書や参考書としても適当ではないかと存じます。本書の執筆は、先進諸学者の研究に負うところが極めて大きいのでありますが、それでも、著者の微力なため、思わぬあやまりを傳えたところが無いかと恐れております。そうした点につきましては、是非遠慮のない御批評をいただきたく、著者は、機会のあるごとに、訂正改善の努力を惜しまないつもりであります。

昭和二十四年八月

目次

著者識

目次

一 序 説	五
二 音 韻	六
三 語 彙(その一)	四
四 語 彙(その二)	四
五 文 法(その一)	一〇
六 文 法(その二)	一四
◆平安時代活用表	一五
◆現代活用表	一六
◆索引	一八

行われる。本書もそれに従って行くことにする。

二、音韻

ことばは人の話すもので、そこには必ず音声が用いられる。その音声は、こまかに聞けば十人十色であるばかりか、同じ人であっても、常に同じ音声が出るわけではない。たとえば、「とり」「鳥」「みず」「水」ということばでも、人により時により、いろいろな声でいわれるであろう。けれども、それをことばとして聞く場合には、だれでも、ある程度の違いは無視して、共通なものを認め、同じ音であると理解するのである。この共通なものは、めいめいが、そのことばを聞きはじめた時からくり返された経験で、おのずから頭の中にもっている観念であって、これを音韻という。人の実際に出しうる音声は無数にあるが、ことばの音韻となると限りがある。それも日本語・中国語・英語・ドイツ語など、言語によってそれぞれ特有なものがああり、また同じく日本語といっても、時代によりまた地方によって、同じではない。音韻を調べるの

音声と音韻

は、音声を通してする。現在のことばは、実際に音声がきかれるからよいが、実際には、音声を通してする。現在のことばは、実際に音声がきかれるからよいが、実際には、音声を通してすることのできない過去のことばの音韻は、文字に書き残されたものによって推し量るほかはない。ところでわれわれは、万葉集でも源氏物語でも、読む時には現在の発音で読むので、「花」は昔も「ハナ」であり、「羊」は昔も「ヒツジ」であって、昔と今と音韻に違いがあるというようなことは、気がつかないのが普通であるけれども、よく調べてみると、必ずしも同じでないことがわかるのである。

アイウエオのエ
と
ヤイユエヨのエ
と
上代文献におけ
る仮名の二種

たとえば、現在では、アイウエオのエと、ヤイユエヨのエとは、仮名も同じ、発音も同じであるが、万葉集などでは、はっきりと区別があつて、万葉假名では、アイウエオのエ（たとえば「得」のエ）には「衣」「依」等を用い、ヤイユエヨのエ（たとえば「枝」「越え」「絶え」などのエ）には「延」「要」等を用いて、混乱がない。そればかりか、キ・ケ・コ・ソ・ト・ノ・ヒ・ヘ・ミ・メ・ヨ・ロの十二の音（古事記ではさらに、モを加えて十三の音）をあらわす万葉仮名は、それぞれ二種類あつて、はっきり使い分けられており、発音にも違いのあつたことが、現在は調べ出されてい